

特 116

609

文 化  
**講演撰集**

BUNKA KOENSENSHU

2586. 2. 20

講演文學會發行

國史上より觀たる禪林五山の文化

栗野秀穂氏講演

「かたきうち」に就て

小酒井儀三氏講演

(非賣品)



始





持11.6  
609

國史上より觀たる禪林五山の文化

今日は主に室町時代文化史の一部である禪林五山に關する文化、文學、文獻、儒學方面のことを申し上げやうと思ひます。

五山とは何ぞや

先づ第一「五山」といふことからお話いたします。鎌倉時代から禪宗といふものが流行しまして、禪寺が方々に澤山出来るやうになり、それも初めは鎌倉に主として建つたのが後には京都方面にも建てられるやうになつて來ましたので、足利義滿の時、京都に大きな寺が八つ出來上り、鎌倉にも五つ六つ出來たところから、こゝに「相洛五山の制」といふものが出來たのであります。これは即ち相—鎌倉の五山と、洛—京都の五山といふことであつて、これで五山といふものがハッキリいたすことになつたのであります。これまでに五山といふものはなかつたといふと、さうではなく、五山はその前からあつたもので義滿の時さういふ制度が出來た譯であります。次いで「五山十刹の制」といふものが設けられました、大きな禪寺を京都に五つ、鎌倉に五つこれが禪寺の頭といふことに定め、他に十

栗野秀穗氏講演

於天王寺小學校内國史會

大正  
15. 2. 27  
内交



の大きな寺を定めて十刹としたのであります。この相洛五山といふのは、  
建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨知寺、淨妙寺 (以上鎌倉五山)  
天瀧寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺 (以上京都五山)  
これだけでありまして、この相洛五山の上に南禪寺を置いて相洛五山の總取締としたのであります。  
この五山を少し説明しますと

鎌倉五山

- 一、建長寺 北條時頼の建てたもので、開祖は支那の坊さんの蘭隆溪。
- 二、圓覺寺 北條時宗が支那から来てをつた元の祖元禪を迎へて建てたもの。
- 三、壽福寺 源實朝がかの我國に禪宗を初めて齎したと言はれる榮西禪師を迎へて建てたもの。
- 四、淨知寺 上杉氏の菩提寺。
- 五、淨妙寺 足利尊氏の伯父上時の夫人の寺といふので、餘り有名ではない。

京都五山

- 一、天龍寺 尊氏が建てた寺で、開祖は夢想禪師。
- 二、相國寺 義滿が建てた寺で、開祖は春屋禪師。
- 三、建仁寺 源頼家が建てた寺で、開祖に榮西禪師。

- 四、東福寺 九條道家が建てた寺で、開祖は聖一禪師。
- 五、萬壽寺 は不明
- 六、南禪寺 は虎關師鍊といふ子僧が建てたもの。

なほこの他に特別に取扱はれた寺が二つあります。それは妙心寺と大徳寺の二ヶ寺で、これを何故五山の中に入れなかつたかといふと、これはいづれも天子の建てられた寺だからであります。即ち妙心寺は、花園天皇が關山和尚を開祖として建てられ、大徳寺は、後醍醐天皇が大燈和尚を開祖として建てられたものであります。この大徳寺は十刹の中の九番目に据えられてありますが、義滿がかくの如き大きな寺を何故九番目といふやふなところへ持つていつたかといふと、これ只一に南朝の天子後醍醐天皇が建てられたといふことにあるのであります。これを見ても義滿といふ人が如何に大義名分に暗かつたかといふことがわかるのであります。それにまた京都五山の順序の定め方を見ましても義滿は自分の祖父たる尊氏の建てた天龍寺を第一番目に持つて行つて、自分の建てた相國寺を二番目に据ゑ、建仁寺の如き大きな寺であるに拘らずこれを三番目にしたといふところを見てもまた義滿の人格の一面が伺はれるのであります。流石に祖父の寺の上に自分の寺を持つていくことだけはしかねたものと見えます。この五山は皆禪宗の臨濟派に限つてゐるもので、曹洞派は一つも入つてゐませぬ。そしてこの五山を取締るために南禪寺の中に「僧録司」といふものを置いたのであります。尤も初めには南禪寺に置きましたが、後にはこれを相國寺に移したもので、それからズツと後徳川家康の時再



び南禪寺に戻してをります。僧録司は大体これだけの變遷をしてをります。これは獨り五山のみならず日本全國の宗教を取締るために設けたのであります。そして周信義堂といふものが僧録司の長官になつたのであります。これは今日で言へば文部省の宗教局長のやうなもので、宗教行政を司り、坊さんの位を上るとか地位をどうするとかいふ方面を司つたのであります。

### 禪宗の傳來

此五山の禪宗は其初め榮西禪師が支那から持つて歸つて我國にひろめたといふやうに一般に申しますが、これには少し違つたところがあります。元來榮西は備中の吉備津彦神社の神主の子であります。比叡山に入つて後考へるところあり、支那に於ける禪宗の開祖である達磨大師の道を學びまして高倉天皇の時支那へ渡り、支那の五台山に入つたのであります。それからこゝで禪宗といふものを研究し、支那に於ける禪宗の一種である達磨宗を學んで日本へ歸つたのであります。日本へ歸ると博多に聖福寺といふ大きな寺を建て、初めてこゝで禪の修業を始めたこの聖福寺は今でも博多にある大きな寺であります。それから博多の出入口である今津にも暫く居りましたが、聖福寺を建て、そこに居る時名前が高まつて都に聞え、將軍頼家に迎へられました。頼家は鎌倉に榮西を呼んで禪のことをいろ／＼尋ねてをりますが、その時は未だ何にも禪のことは話してもをりません。それで榮西が鎌倉

中に於て將軍に禪の宣傳したのが禪の始めだとよく申しますが、それは當らないのであります。その時の記録を見ますと、その時は觀音修業を唱へて禪のことは未だ口に出してゐません。禪は天台から別れたものであるから天台の一部だと申しただけであります。けれども將軍頼家は大いに榮西に歸依いたし、京都に寺を建て與へ、その時の年號をどうして建仁寺といふ名をつけました。ところがこの建仁といふ年號を寺の名にとつたといふことが問題になつたのであります。それは年號を寺の名にとるは天台の寺に限つてゐる。天台の專賣だ、他の宗旨には出來ないと言つて叡山の荒法師達がやかましく言ひ出したのであります。そこで榮西は禪宗の看板を塗り變へて天台の子院と申した。禪宗には圓密禪戒の教へもあり、密教もあるから天台の一部分だと言つても差支へない、そこで天台子院と言つて問題を避けたのであります。そこで天台の坊さんもこの建仁寺をヤツト認めた譯であります。榮西は禪の研究を止めなかつたのであります。しかし榮西は禪の研究はしました。人が對して禪の宣傳はしなかつたのであります。禪宗をひろめたのはこの榮西ではなくして、弟子達であつたのであります。榮西の弟子の行勇、榮朝といふ二人の人が初めて禪を人々に教へひろめたのであります。それで榮西といふ人は禪の開祖にはなつてゐますが、實際に於ては彼の一生に於ては禪を唱へたのでなくして、やはり天台の密教をやつてをたつたのであります。それも天台の人々に建仁寺を壞されることを恐れたのであります。密教にかくれて禪の研究をやり弟子に教へたのであります。榮西が一生かゝつて書いた本に「興禪護國論」といふ書物があります。これを讀むと禪が榮えれば國が榮へると



いふことを書いてをりまして、これが發表されたのは三代實朝の時でありすが、今日これは果して榮西の業述かどうかと疑つてゐる人もあります。今日建仁寺の中に興禪護國院といふ榮西の廟があります。

禪宗が榮西の弟子達によつて世間にひろめられると次第にこれに歸依する人が多くなつて、殊に武士の中に歸依者が多くなり、だん／＼この禪が盛んになつて、遂に只今申しましたやうな五山の如き大きな寺が出来たのであります。とりわけ都鄙の間に於て禪宗が盛んに行はれたのであります。國史の上はこの都鄙といふ言葉がよく使はれてをります。この都鄙といふのは都と田舎といふのではなくて、鎌倉と京都といふことであります。この都鄙地方に鎌倉時代の末頃から大きな禪寺が澤山に出来、随つて禪僧も多く出まして、また幕府にも禪僧が入り、將軍初め幕府の政治家達を指導するところが多かつたのであります。そして南北朝時代から後に至つてこの五山から多くの名僧英傑が輩出した次第であります。五山の坊さんが政治方面に關係したのは何時頃かといふと、北條氏の執權時代でありまして、時頼時代から始まり、時頼は蘭隆溪を師として禪を學び、時に政治の要諦を尋たといふこととであります。また時宗は支那から来た祖元といふ僧について禪の道に入つたといふ事でもあります。またその頃支那から歸化僧の来たものが多かつたのであります。何故歸化僧が多かつたかといふとその頃支那では宋が亡んで元が起り、宋に仕へてゐた坊さん達は野蕃人の元に仕へるを屑しとせず、その頃禪宗が盛んになつて来た日本へ渡つて禪をひろめやうとして、多くの禪僧が支那からやつて來

たのであります。初め来たのが祖元であつて、次いで兀庵、寧一山が来た、この祖元と兀庵は昔に時宗の師となつた人でありまして、兀庵の弟子の慧安といふ人は蒙古襲來の際祈禱をして盡した人でもあります。右の内、寧一山といふ人は元の忽必烈に仕へてゐた人で、初めは元の隱密となつて日本へ来たのであります。忽必烈からお前は禪僧であるから、今禪宗が盛んだといふ日本へ、禪僧といふことで行つて日本の國狀を探つて來いと言はれて日本へ来たのであります。ところが鎌倉幕府に於ても寧一山の來たのを見て、これは怪しいと睨み、これを伊豆に押し込め白狀させやうとしたのであります。初めは彼も實を吐かなかつたけれども遂には包みきれず忽必烈の間者として來た譯を白狀したものであります。幕府に於ても寧一山の學を惜しんで、このまゝ法の爲に日本へ留る氣はないかと勧めたところ、彼も白狀してしまつた今日今更支那へ歸ることも出来ないといふので、遂に日本へ歸化して日本の學のために働いたのであります。この人は南禪寺に於て禪宗を盛んにした人であります。その後鎌倉を出て雲水行脚を志し今の仙台の地方へ參りました時、松島附近のツバタナワといふ所に蒙古碑といふものを建てました、それは元寇役に命を落した蒙古兵十萬の無名の士の靈を弔つたもので、碑の面に蒙古字で碑文を刻んだのであります。これを江戸時代の學者は蒙古文がよくわからず、でたらめのものだと言つてゐたのであります。最近研究の結果確に蒙古字だといふことがわかつたのであります。また松島の雄島にも寧一山ノ碑といふのがあります。それから松島の有名な瑞巖寺は初め寧一山が住んだといふことを傳へてをります。



かういふ風に宋や元から歸化僧がやつて来て、いろんな方面から日本の文化を開いたのであります。今日の言葉の中にも當時の歸化僧が持つて来たと思はれるものがいくつもあります。饅頭、塔頭、羊羹などで、頭をチュウと讀むのはこれは元音であります。納豆、白外郎などもそれであり、元來日本の食物の名を調べますと、これだけで一つの文化史が出来るやうなものでありまして、いろいろな外來語が入つてをります。使を擧げると宋、元、明等から入つて来た羊羹、白外郎、饅頭、納豆等、ポルトガルから来たコンペイ糖、アルヘイ糖、カルメラ、それから最近の外來語と、この四通り大体變化してをります。

### 宋學の傳來

支那から歸化僧が来たばかりでなく、また日本からも多くの僧が支那へ行つて支那のいろんなことを學んで歸つて来たのでありまして、これ等の坊さん達が皆支那の眞似をしたのであります。いつの時代にも日本人は外國の眞似をしてゐますが、何をこの支那歸りの僧が眞似したかといふと、前に申した五山の制であります。都鄙に五山を置いたことであります。それから五山の上に僧録司を置いたのも、明の三代の成祖の時僧録司を設けた、それを眞似したものであります。かういふ制度を持つて来た程でありますから、前に申した饅頭、羊羹、納豆等の食物を持つて来たことも明かであり、それから、當時支那の五山に於て盛んであつた儒學を、これ等の日本から行つた僧達が默つてのませ

うや、必ずこの儒學をも日本に傳へたといふことも明かであり、當時支那の五山に於ては、言葉を変へて言ふと支那の禪寺に於ては皆朱子學を研究したものであります。元來朱子學は南宋の朱熹が著した學問で、それで朱子學とも宋學とも言ふのであります。朱子學の教典は何かといふと四書であります。四書の中で最も重んぜられたのは大學で、次が中庸、論語、孟子といふ順序であります。日本では論語をやかましく言ひますが、朱子學では大學、中庸、論語、孟子の順序であります。朱子學が起つてから四書といふものが非常に重んぜられたので、その前は五經は漢唐の訓話の學問である。又文字の學問である。四書は性理の學問である、哲學である。そこで四書が現れてから今迄の五經のやうな文字の學問ばかりではいけないといふことがわかつて四書が非常に重んぜられるやうになつたのであります。四書と共にやかましく言はれたのが大極圖説であります。これは周濂溪といふ人の書いたもので、宇宙萬物を解説した支那の哲學の根本であります。ところでこの朱子學をどうして禪僧が研究するやうになつたかといふと、最初儒者は佛敎を非常に嫌つてをつたのでありまして、あの文章軌範の中にもあります、韓愈の「佛骨を迎ふるを難するの文」を見ましても如何に佛敎を嫌つてゐたか分ります。ところが禪學が起つてから禪宗と儒學とが結びついたのであります。何故結びついたかといふと、五經の學理の解説さへすればよかつた學問が、四書となつて哲學的學問となつた、即ち考へる力が必要になつた。そして一方禪宗といふ宗教はどういふものかといふと、これも註釋的經文から離れて、文字から離れて、文字から離れて、人間の精神といふものを傳へる敎へである、即ちこ



れも考へる宗教である。そこに両者共通の点があり、そこで儒者と禪僧とが仲よく結びついて、五山に於て朱子學を研究するやうになつたのであります。そこで日本へも支那から歸て來た坊さん達が禪宗を傳へると共に朱子學を傳へたに違ひないのであります。しかし何時朱子學が傳はつたかといふことは明文がないために甚だ明瞭を欠ぐのであります。それで書いた物によつて判斷するより外ありませんが、大体これには四つの説があります。その一つは俊菴國師が支那から二百七十部の書物を持つて歸つたからその中に朱子學の本かキツトあつたに違ひない、といふ説であります。しかし實際はさうではありません。第二の説は龜山天皇の歸依深かつた虎關師鍊が正嘉年間に傳へたといふ説であります。これも説であつて確なことはわかりません。第三は宋や元の歸化僧が傳へたといふ説で、第四は後醍醐天皇の時天台の坊さんである玄慧和尚が傳へたといふ説であります。第四の説には証據がありません。それは學者であらせられた花園天皇の宸記を見ますると幾らも朱子學のことが書いてありまして、中に宋學は工夫の學でいくけれども禮儀を正しくしないから朕はとらないといふやうなことが書いてあります。しかし何時傳はつたといふことが明記してある譯ではなく、かく書かれてゐるところを見ますると既にこの頃は朱子學といふものが世間にひろまつてゐたといふことが考へられます。その頃既にひろまつてゐたとすれば、この以前に歸化僧達が禪と共に傳へたと考へるのが穩當であらうと思ひます。

かくて禪と共に朱子學が盛んになりまして、遂には五山の坊さん達の間にはスタンチユウスインヒウ

と言葉が流行語のやうになりました。これはどういふことかといふと、不宗朱子本非學といふことで即ち朱子學にあらざれば學問にあらずと言ふのであります。これを以て見ても如何に朱子學が盛んであつたかゞわかるのであります。

### 五山文學と朱子學の傳播

次にこれ等朱子學の學者の中にはどんな人があつたかといふと、先づ禪宗の坊さんとして有名な南禪寺を建てた虎關師鍊であります。この人の書いたものに濟北集といふ文書があります。全部漢文でありますが非常にあかぬけのした文章で、有名な本であります。次に清拙明極といふ人があります。この人は神戸の楠寺を開いたので有名でありまして、楠寺を開いたといふところから楠正成と結びつけて、正成がこの明極について禪をやつた、正成が最後に戦ひ破れた時、尙新田義貞等と再擧の可能性があつたに拘らず思ひ切りよく切腹してしまつたのは禪をやつたおかげだなど申してをりますが、清拙明極は楠寺を開いただけであつて、楠正成との關係は何等根據のない話であります。それから梵竺仙といふ人も元僧でありまして、この人は字が非常にうまい人で、この人の書いた一字物の軸は茶の方で非常に珍重されるもので今日可成り高價なものであります。この人等の字が南朝に入つて、北朝はお家流であります。南朝は唐風の字が行はれたのであります。それから日本人として有名なのは雪村友梅で、支那の僧から日本にこの人ありと賞められたといふ人でありまして、それから中巖圓月、



この人の書いた文章も澤山ありますが、吾々にとつて有名なのは日本史を書いたことでもあります。しかしその日本史たるや、神武天皇は吳の太白の子孫だとか、日本は昔支那へ貢を送つて支那へ屬してゐた國だとか譯のわからぬ、大義名分に暗いものであります。足利義滿など大義名分に暗かつたといふことはその人自身がさうであつたばかりでなく周圍にかういふ人が居つてその勸化を受けたところ多かつたといふことも考へられます。その外文章のうまかつた人に周信義堂といふ人があります。この人の書いた空華集といふのは五山文學全集の中に入つてをります。次に中津絶海といふ人で、これは義滿の師匠で相國寺の二代に据つた人で、國師號を贈られ中津絶海國師と申します。この人は五山の中でも非常に詩のうまかつた人で、詩集には蕉堅稿絶海録といふのがあります。次に岐陽方秀といふ人は日本で初めて四書の訓点を始めた人であります。この方秀で一期を劃しまして、方秀の弟子に得巖惟肖といふ人があり、この惟肖の門人に桂庵といふ人があります。この桂庵禪師が日本の朱子學を大成させ四方へ分布させた人で、忘れてはならない人であります。この人が熊本へ行つて、その頃の隈府へ行つて、學問が好きであつた菊池武朝が朱子學を學んだのであります。武朝は桂庵を隈府の城に入れ孔子の廟を作りお祭りをし、桂庵は詩を作つて日本全國に朱子學がひろまるのを喜んだといふことであります。桂庵は隈府の菊池氏が止めるのを斷つて次に鹿兒島に行つてをります。鹿兒島は又土地の氣風から朱子學に適した所で、島津公が朱子學を好まれたところから、桂庵が行くと島津公に遇されてこの地方に一層朱子學をひろめたのであります。一方關東の方には足利に學校あり、金

澤には文庫あり、京都から一流の坊さん達が行つて講義をしたのであります。次いで應仁の亂が起つて京都の文化が根柢から破壊されると京都の坊さん達は京都を捨て、皆地方へ出かけたものでありますから、こゝに朱子學は日本全國にひろまつて行つたのであります。これに加ふるに、當時支那から印刷術が渡來し、書物の出版が容易になつたために朱子學が一層の隆盛を來したのであります。時間が充分ありませんで、あらましの説明に終りましたが、今日はこれまでにいたしておきます。

(終)



# 「かたきうち」に就て

小酒井儀三氏講演

於大阪談話會

今晚は「かたきうち」について少しばかり御清聴を煩はします。

單に「かたきうち」と申しましても時代によつて多少變遷がありまして、今日では勿論法令の上から「かたきうち」と云ふことは、許されてをりません。又「かたきうち」といふ言葉の意味も余程違つてをります。この間いどいめにあはされたから今日は一つかたきうちをしやうといふやうなことを言ひますが、それは昔の復讐ではありません。學生が野球の試合をいたしまして敗けた方がかたきうちをすると言つても、昔の復讐とは意味が違ひます。大變穩な意味で英語でいへば、リヴェンチといふ字がこれにあたる、單に仕返しといふ意味であります。

ところで昔のこの「かたきうち」には、いろいろと細かいこみ入つた條件がございます、又それを調べれば調べる程、むつかしくなつてわかりにくくなるやうであります。第一封建時代に行れた「かたきうち」のことを書いた書物が確なものも少くない。世間には澤山かたきうちのことを傳へた書物がございりますが、講談とか小説とかいつたやうな、所謂文藝文學に屬するやうなものは澤山ございりますが、それは甚だしく潤色され誇張され綾がつけすぎでありまして、事實と余程違つたもの

が多いやうであります。その潤色を取りさつてゆきますと、本當の事實と思はれる骨子が少なくなりました、遂ひには全体をも捨て、しまはなければならぬといふやうなことになるやうです。世間によくいふ宮本武藏のかたきうち、田宮坊太郎のかたきうち、といふやうな話は非常に名高いことでありますけれども、それが何時行はれたか、といふやうな年代月日等も不明でありまして、結局わからないことになり、骨折つて調べて、遂に要領を得ないといふやうなことになるやうです。この「かたきうち」といふことは、一寸興味があり又手軽に調べられさうであつて、實際は非常に困難なことであると、私自身は感じてをります。

先づ第一「かたきうち」といふことには、どんな條件が必要であるかといふと、第一は「死に報ゆるに死を以てする」といふことで、これが一番必要なことであり、ほとんど唯一の條件であつて、他の條件はなくてもいゝ位に思はれます。最初かたきうちが起る原因はいろいろあります。初めから合意の上武士と武士とが果し合ひをする、議論はやめて腕づくでゆかうといふ果し合ひ、或は卑劣にも劍道の腕その他重要な地位を占められたといふやうなことを嫉むあまり相手をだまし打ちにする、といふやうな、その原因となり得ることは多々ありますが、他のものゝために殺される、死といふことがかたきうちの起る條件として必要であります。だまし打ちにしても、果し合ひにしても、一方が死に至らずして両方とも生きてゐるといふやうな場合はかたきうちには成り立たない。しかしその死といふものは必ずしもその場合すぐに死ななければならぬといふことはありません。その原因の起つた時



は重手を負つたといふだけであつたが、遂に死に至らしめた。或は直接手を下さないでも間接に殺したことになるといふやうな場合にもかたきうちを構成する場合があります。ある者のために讒言され遂に主君の立腹を買ひ切腹させられたといふやうな事、或はある者のために法に觸れるやうにされ遂に死に至つたといふやうな場合でも、無論死といふことは同じことでありますから、これもやはりかたきうちを構成し得るのであります。御承知の赤穂浪士のかたきうちの原因の如きも、直接には吉良上野介が浅野内藏頭を殺したのではなく、むしろ最初の意志といふものは浅野の方から吉良を殺さうとした、ところがその結果は國法に照らされて浅野が遂に切腹を命せられた、そこで浅野内藏頭を死に至らしめたものは何であるかといふことは當時非常に議論されたところで、萩生徂來の如き、國法が浅野内藏頭を死に至らしめたものである、赤穂の士共が怨むならば國法をこそ怨むべきである、吉良上野介を讐呼はりするのはお門遠ひであるといふことを論じてをります。しかしこれは一般の意見としては非常に反對されたものでありまして、極端に言へば萩生徂來は旋毛曲りな、常識に欠けたものであるといふやうなことも言はれたのであります。無論國法によつて浅野は切腹してゐるが、吉良上野介といふものがなかつたならば浅野は死に至らなかつたのである。直接手を下さないとしても間接に手を下したことになるのであります。その他の場合でも、御承知の有名な芝居でいたします鏡山、あれは石州濱田の城主松平周防頭の江戸屋敷で起つた事件であります、芝居では皆名を變へまして、待女の澤野—芝居でやる岩藤、一方は瀧野といふ女中—芝居では尾上、この尾上の附女のおさ

つ、源氏名を山路と言ひますが、芝居でやるお初であります、この事件の如き澤野(岩藤)が瀧野(尾上)に向つて非常な侮辱を與へる、芝居でやる所謂草履打ちであります。それを非常に残念に思つて遂に自分の腰元を手紙を持して出した留守に自害をして死んでしまふ。この場合は直接澤野が手を下したのではありませんが非常な侮辱を與へた、死ななければならぬ程の侮辱を與へた。遂に死といふ結果を來すやう澤野が導いたといふことで、おさつがかたきうちをする。(これはかたきうちの最も早い例、その日に直にかたきうちをした例であります、このことは後で又申し上げます)これなんかも條件は死になつてをります。つまり死に報いるに死を以てするといふことは直接手を下さずとも結果が同一であればつまりかたきうちの條件になると考へます。但し除外例としては、かたきうちを法として許さないのは、主君が臣下に對して死に至らしめた場合は、昔から武士の道徳として許さなかつた、武士道として許されなかつたのであります。中には随分横暴な主君がありまして、忠臣を誤つて殺したとか、或は思ひちがひをして殺したといふやうなこともあります、さういふ場合でも主君を敵呼はりすることは出来なかつた。主君が臣下を手打ちにする、よしそれが誤解であつても勿論この被害者の子弟が主君に對してかたきうちをすることは出来なといふ武士道になつてをります。次に、死に報いるに死を以てするといふ条件があればその他の条件はそれから自然に割り出される即ちその条件の第一は、うちの方からは必ず仇人を殺すといふ目的を以てしなければかたきうちにならない。第二には、被害者が死んでゐないとかたきうちは構成しない。今日言ふところのかたきう



ちは、甲と乙と何かの勝負をして乙が負けた場合、負けた者が自分自身で仇をうつ、即ち仕返へしであります。又たさへ、かたきうちをしたやうな結果になりましても、最初からかたきうちをするといふ目的でしたのでなくてはかたきうちとは言へません。御承知の假名手本忠臣蔵の五段目に定九郎が與市平といふ老人が金を持つて歸つて來るところを待ち伏せてゐて殺してしまふ、そして金を取つて逃げやうとする時、與市平の息子の勘平が鉄砲を持つて獵に出てゐて猪と間違へて定九郎を撃ち殺すその結果が勘平が父の仇をうつたことになりませんが、それは猪だと思つてうつたのであるから、たとへ結果はかたきうちになつても、それはかたきうちにならない、即ち復讐といふことを自覺しなければかたきうちとは言へません。もう一つの條件はかたきうちのうちてといふものは曾てかたきうちの原因を作つた被害者の縁邊の者でなければならぬといふことであります。親のために子が仇をうつ、これは勿論で、或は祖父のために孫が、或は伯父のために甥姪等が、兄のために弟が、師匠のために門人が、主人のために雇人がといふ風なものであります。中には友人のためにかたきをうつといふやうな、縁邊とは言へない變則なものがあります。それから、うちては被害者の目下、若くは同等のものでなければなりません。親に對する子、兄に對する弟、祖父母に對する孫、伯父に對する甥、師匠に對する門人といふやうな皆目下であります。中には子のために親がかたきを打つたといふやうな例もありますけれども、それは變則でありまして、大体目下といふことが本則であります。かういふやうに「かたきうち」の條件は四つ程ありますが、何と言つても必須條件といふと第一の

死に報ゆるに死を以てするといふことでありまして、第二第三第四の條件は第一の條件から當然割の出されるものであります。

次に「かたきうち」が日本に行はれた沿革を多少調べますと、前に述べました、主君に對しては臣下がかたきうちをすることは出来ない武士道になつてゐたといふことの除外例として擧ぐべきことが日本書紀の中に出てをりますが、それは（公表を憚る点あり殊殺す）これが國史に見えたかたきうちの最初の例であります。日本書紀には早くから「父の仇は俱に天を戴かず」といふ言葉があります、これは支那から來た儒教の思想であります。日本書紀の出來たのは奈良朝の初めでありまして、支那から輸入した言葉であるとしても日本の道徳は儒教の不俱戴天と同様の考へを持つてをつたのであります。即ち、「かたきうち」といふことを道徳的行爲、子弟たるもの、義務であること考へたといふことがわかります。平安朝になりますと、だん／＼かたきうちが國史に現れ、殊に平安朝の末期源平時代になつて武士道が益々發展して……私は日本の武士道といふものは建國時代からあつたものと廣く考へますが、この武士道が源平鎌倉時代になつて一層發達しますと、不俱戴天といふやうな仇うちの思想もだん／＼濃厚になり強烈になつて、かたきうちの實際の事柄も非常に數多く現れてをります。頼朝時代の建久三年の曾我兄弟の仇うちの如き立派なかたきうちの例であります。この曾我兄弟のかたきうちの少し前、既に頼朝自らかたきうちに類したことを前例として示してをります。それは御承知の頼朝の父義朝が平治の乱に破れて京都を逃げ近江から美濃に出で舟で伊勢に行き、尾張の知多半島



のネマといふ所に行き、ネマの豪族である、義朝の家來分である大里定宗父子に隠まはれましたが、大里父子が褒美の金に目がくれ遂に平家方に密告して義朝を殺してをります。それを頼朝が非常に遺恨に思ひ、平家没落後この大里父子を捕へて、人の目の前で首を刎ねたのみならずその首をさらしてをります。かくの如く頼朝が武士道の鼓吹者であると共に「かたきうち」についても先例を示してをります。その後鎌倉時代になると太平記等に「かたきうち」の例が多々出てをります。そして太平記の文章はかたきうちを賞揚し奨励して書いてをります。室町時代になつて謡曲が盛んになります。この謡曲の中に「かたきうち」が澤山取り入れてあります。望月、放下僧、等を初めとし、曾我兄弟の仇うちを取り入れたのには何々曾我といふやうなのが澤山あります。それから次いで織田信長の仇明智光秀を討つた秀吉の天王山の葬ひ合戦があります。それから少し前後しますが上杉謙信は、父が長尾景虎と言つてゐたので、この父の景虎が戦中敵の落し穴に陥つて非業の最後を遂げた、その仇を立派にうつてをります。さういふ具合にして徳川時代になります。「かたきうち」が多くなつてをります。徳川時代になると「かたきうち」の傳記が澤山残つてゐまして、急にその數がふえて來たやうに考へられますが、これは傳記が澤山残つてゐるから數がふれた。その以前は傳記が少くないから「かたきうち」が少なかつたと見るのは當りません。家康が文教を奨励すると共に儒學が中心となつて世に普及しました。殊に林羅山などが朱子學を奨励しました結果、朱子學の君臣關係といふものは非常に重く見られ、そして「かたきうち」といふものはどうしてもしなければならぬといふやうな感じを

當時の武士各階級は勿論町人百姓に至るまで頭に染み込ました。そして泰平時代の戦争など全くない時代に「かたきうち」がたまにあると非常な呼び物となり、世間では持てはやす、文學者は本に作る、又當時は平民文學が勃興した時でありますから一層世間にそれが宣傳される。そこで當時の世間の者は「かたきうち」はどうしてもしなければならぬもの、せずにはゐられないものと考へ、又親や兄が非業な最後を遂げその子弟が安閑としてゐると世間の非難が随分ひどかつた、さういふ關係で「かたきうち」といふものが江戸時代に於ては奨励された傾きがあり、随つてその數も増してゐたものと考へられます。

次に「かたきうち」をしたもの——江戸時代頃から明治以前頃までの——約二百六十件の主なるものを調べた結果を申しますと、第一はかたきをうたれる仇人とうちてとの身分の比較であります、これは何も私が澤山の「かたきうち」を一々調べて統計をとつた譯ではありませんが慶長頃から慶應頃までの二百六十年間の確なと思はれる「かたきうち」百について統計をとつてみますと(勿論百以上澤山ありますけれども、私の調べたものは二百には達しません、百五十位しかありませんが内五十位のものには不明な点があり、確なものとしては百位であります。その百を單位として統計をとります)先づ「うちて」と「うたれるもの」とが双方とも武士であつたといふのが五十五、即ち過半数は士であります。次に、仇は士であるが「うちて」は士でない、百姓町人といふやうなもの、これが割合少く三であります。しかし百姓と百姓との「かたきうち」の例は割合に多く十二あります。百姓と町人



町人と町人も割合多く二十一あります。

次に時代の上から考へますと、士と士との「かたきうち」は大體元祿以前に多く、享保から天明寛政享和文化文政の頃になりますと、今度は百姓町人の「かたきうち」が多くなつてをります。この原因は一つは世間で、「かたきうち」を非常に賞揚する「かたきうち」をしないものは意氣地ないものとされ、たとへ百姓町人でも「かたきうち」をしなければならぬといふ思想が盛んになりました、殊に寛政時代には平民文學が勃興し爛熟し「かたきうち」が盛んに宣傳され普及された結果、百姓町人も「かたきうち」をせずにはゐられないといふ思想になつて來たのであります。又元祿以後は平民の勢力が勃興して、士で町人から借金をした連中が大分あつた時代で、町民の勢力が強くなると共に、町民の學問に對する自覺も起り、書物をよく讀む、讀めば「かたきうち」の思想も盛んになつたといふやうなことから、享保以後に町人の「かたきうち」が多くなつたものと思はれます。

次に、うちと被害者の關係を調べて見ますと、父のために子がかたきをうつのが一番多く五十九約六割あります。母のために子がかたきをうつのが八、これは少くないやうですが、女はやはり殺されるやうな原因を作ることが少ないからであります。それから祖父のためといふのが一つ次に、兄のため弟妹がといふ兄弟姉妹の關係のものが二十一あります。これは即ち被害者が年若くして子がなといふ時は當然その弟妹がかたきをうたなければなりません。それから甥や姪が八、師匠のための弟子が一、主従關係が二。それから夫のために妻がといふのが五。それから弟のために兄が、友人の

ために友人がといふのが各一宛あります。これを總計しますと百以上になります。それは「かたきうち」をするのは一人でなく、二人三人の場合があるからであります。それから「うちて」が女である場合は極めて少く僅か八で、他は皆男であります。

次に「うちて」の年齢を調べますと、一番若い例は九歳であります。勿論これには母や伯父の助太刀がありますがこれが一番若い例であります。次は十三と十四、十六、十七といふのがあります。中には「かたきうち」を願ひ出た時は六歳であつたが、あまり少いのでモウ少し成人してからにしろといふので十五になつて元服して「かたきうち」に出で、翌十六の年めでたく仇をうつたといふのがあります。このものは福島原町の佐々木清十郎といふ當時六歳の子供であつたのであります。

それから「かたきうち」の原因が起つてから本望を達するまでの年限を調べますと一番早いのは前に申しました芝居でやる鏡山の例で、その日の中に「かたきを」うつてをります。最も長い例は五十二年かゝつたといふのであります。次が四十一年、三十年、二十九年、二十八年、十年、五年、三年といふ例になつてをります。それからその年の中に本望を達したといふのも可成り多く、百人中七八人あります。

それから次には「かたきうち」が流行した結果として、種々弊害も起つてをります。例へば、乱暴に喧嘩を吹きかけて吹きかけた方が腕が劣つてかへつて殺された、この場合その子弟がかたき呼はり出来ない筋合にも拘らず、何でもかでも親が殺された以上「かたきうち」をしなければならぬとい



ふので、罪もない相手を仇と狙ふといふやうなこともあります。又、かたきをうつた者を、うたれた者の子弟が又かたき呼はりをする、又その子弟がかたきをうつ、といふやうに子々孫々まで恨み合ふといふやうな例もあつた。江戸幕府は「又かたき」は絶対罷りならぬと禁じてはをりましたが、かたきうち流行の結果やはり「又かたき」が行はれたのであります。それから「かたきうち」を世間で賞揚し、諸大名もまた臣下の者でめでたく本望を達すると大いにこれを賞め加俸したものであります。それに助太刀をした者も褒美に預るといふやうなことで、仇が弱くて心配がない、褒美にありつくこと確實だといふやうな時は所謂助太刀が續々現れて徒に事件を増大するといふやうなことがあります。有名な江戸の浄瑠璃阪の仇うちの如き「うちて」が三十八人、うたれた者が三十人といふ大袈裟なものがあります。それから助太刀者は前以て届出でねばならないのでありますが、さうでなく臨時に飛び出す助太刀がよくありまして、大勢助太刀を頼んで遺趣晴しをするものがあります。又追ひ討ちといふことをする、丙が仇の乙をめでたく討ち果すと、乙の縁邊のものがすぐ丙の後を追うて討つといふやうなことをやるかういふいろ／＼な弊害もあるのであります。

そこで明治となりまして、いろ／＼な法曲が出来まして、明治六年二月「かたきうち」を禁ずることになつたのであります。けれどもその後「かたきうち」をした例はあります。それは明治十三年筑前秋月の藩士白井六郎が一ノ瀬直久のために殺された、この一ノ瀬は甲府地方裁判所の判事でありましたが、東京に居る時三十間堀の黒田候の邸に於て白井六郎の息子が刺し殺しました、其時白井の息

子は死刑に處すべきであるが罪一等を減じて無期に處すといふことで罰せられたのであります。かく法によつて禁じられました。「かたきうち」は全くなくなり、「かたきうち」といふ意味が初めに申しましたやうに單に仕返しといふやうな意味に使はれるやうになつたのであります。尙ほ「かたきうち」はどこで一番多く行はれたかといふと、江戸で一番多く行はれてをります。そしてそれは田舎で起つた事件のかたきうちを江戸で行つたといふのが大部分でありまして、江戸の者同志のかたきうちを江戸で行つたといふのは少数であります。それは當然のこと、田舎で事件が起るとその仇人は多く諸國の者が入り込んでゐる廣い江戸に通れる「うちて」もそれを追つて江戸に出るといふことになりま

す。又江戸で事件が起ると反對に仇人は田舎に通れる、そこで田舎の事件は江戸へ持ち込み、江戸の事件は田舎に持ち出す、随つて江戸の事件で江戸でかたきをうつことは少くなるのであります。江戸から田舎に持ち出したものが百中三十あり、田舎から江戸に持つて行つたのが二十幾つあります。

以上申上げましたことを、一々實例をお話すると大變面白いのでありますし、尙ほ更に支那の「かたきうち」はどんなであるか、西洋ではどうかといふやうなことをお話したいのであります。次回といたしまして今晚はこれで御免を蒙ります。

(終)



釀造元



兵庫縣灘  
花本木家

Vertical text columns on the right page, likely a continuation of an article or advertisement. The text is small and difficult to read in detail, but appears to be organized into several columns.



294  
47

大正拾五年貳月貳拾日納本  
大正拾五年貳月貳拾日發行  
(非賣品)

發行人 大阪住吉區阿部野町一四四番地 伊澤廣明  
編輯人 伊澤廣明  
印刷所 大阪市北區小深町四三番地 十井國華堂  
發行所 大阪市南區問屋町三十九番地 講演文學會  
東京市麻布區單筒町五十八番地 講演文學會東京事務所  
電話大阪兩三二七一番

陸海軍諸官衙銀行社會御用  
轉任 旅行 保存 運搬  
榮轉進物八甲中ノ蒲團袋三定々  
生地見本カ多ク進呈

便利經濟



製クツズ 袋團蒲  
一バカ具夜各一

白地	四枚入	6円000	送料
	六枚入	7円800	四十五錢
茶染	四枚入	6円500	滿鮮
	六枚入	8円300	九十二錢

大坂西區幸町五丁目吉橋電停前  
製造店 中田乙造店  
電話 櫻川長三〇九番



終

